第1章　動物の特異的能力

西洋世界における動物の位置づけ

本章では，動物のもつ，あるいは動物の周辺で観察される，さまざまな特異的 anomalous 能力を概観するが，まず最初に，実験的に検証された動物の特異的現象を扱うことにする。具体的には，人間が動物に対して及ぼす超常的影響と思われるもの，および動物自身が引き起こす超常的現象と思われるものについて，その概略を述べる。その前に，西洋では動物がどのように位置づけられているのかを簡単に解説しておかなければならない。

19 世紀後半に，いわばキリスト教世界で開始された超常現象研究は，現行の科学知識では説明できない能力を人間が本当にもっているのかどうかを，さらには人間の心ないし魂が死後にも生き残るものかどうかを明らかにすることを目的としていた（心霊研究協会，1993 年，17–21 ページ）。しかしながら，人間と動物を峻別する西洋世界では，動物を人間と同列の研究対象とすることは考えにくかったのであろう。そのためなのかもしれないが，動物を対象とした実験的研究は，少々遅れて開始されることになる。

ちなみに，英国の心霊研究協会の出版物に動物の特異的能力に関する記述が初めて登場するのは，フランスの哲学者，アンリ・ベルクソン（1859–1941 年）が同協会の会長であった 1913 年のことのようである。それは，オクスフォード大学に在籍していた著名な心理学者，ウィリアム・マクドゥーガル（1871–1938 年）が座長を務めた，会員および準会員の私的会合で報告されたもの（Anonymous, 1913）で，後出するエルバーフェルトの“考える馬たち”の事例史とその実験の結果であった。後ほど述べるように，マクドゥーガルは，アメリカのハーバード大学を経てデューク大学へ移った後，レディーという牝馬を対象にしたジョゼフ・B・ライン夫妻のＥＳＰ実験に協力することにな

るが，それには，この時の経験が関係しているのかもしれない。

その翌年の 1914 年には，ベルクソンの後任として心霊研究協会の会長を務めていた，英国の著名な哲学者，フェルディナンド・シラー（1864–1937 年）による短報（Schiller, 1914）が掲載された[註1]。これは，やはり後述する，ドイツの心理学雑誌に掲載された“マンハイムのロルフ”という“考えるイヌ”に関する実験報告の紹介である。この年は，かの“賢いハンス”の実態を明らかにした著書（Pfungst, 1911）が出版された 3 年後に当たる[註2]。

ところで，西洋には，博物学 natural history という，ギリシャ時代にまで遡りうる伝統的な学問分野があり，それに従事する，博物学者（ナチュラリスト）と呼ばれる人たちがいた。とはいえ，かつてはまだこうした学問で生計を立てることはできず，そのほとんどは有閑階級の高級な趣味のようなものであった。しかしながら，大航海時代以降，西洋列強が世界各地を植民地化したことで，内陸部へも盛んに探検が行なわれるようになった結果，厖大な数の動植物が発見されたため，実用的な見地からもその分類が必要となり，そのおかげで博物学は隆盛をきわめることになったのである。探検家としても名高いアレクサンダー・フォン・フンボルト（1769–1859 年）や，当初は富裕層に向けて動植物の採集をしていたアルフレッド・ウォーレス（1823–1913 年）は，まさに大博物学者であったし，かのチャールズ・ダーウィン（1809–1882 年）も，博物学者として出発したと言ってもまちがいではない。

それに対して，科学や科学者という名称が生まれたのは，19 世紀も半ばになってからであった。わが国が西洋諸国と再び接触をもつようになった明治初年は，科学者という職種が誕生してからまだ日の浅い頃だったことにな

［註 1］心霊研究協会が刊行する定期刊行物には，*Journal* と *Proceedings* とがあるが，1949 年 7 月までは，前者は，会合の報告や連絡事項を中心とした，会員にのみ配布される隔月刊の小冊子で，主な論文は後者に掲載されていた。前者に掲載されるのは，会合で口頭発表された短報が中心だったのである。なお，前者は非会員も購読できる季刊誌として，現在でも刊行が続けられているが，後者は，その後，会員へ無料配布される形の不定期刊となり，最近では数年に一度程度しか刊行されていない。

［註 2］この著書は，『ウマはなぜ「計算」できたのか』というタイトルで 100 年近く後の 2007 年に邦訳，出版された（プフングスト，2007 年）。

る。博物学は，内容が多岐にわたるようになった結果として，地質学や鉱物学，動物学，植物学などに区分されたわけであるが[註3]，ダーウィンはまさに初期の生物学者であった。しかしながら，キリスト教の伝統を引く西洋では，死んだ標本（つまり死物）をもとに研究を進めることがその象徴であるかのように，動植物はあくまでもの，つまり物体として扱われるのである。

稀代の生物学者であった今西錦司（1902–1992 年）は，こうしたいわば死物学から生物学への開眼体験を，次のように鮮やかな情景として描き出している。しばしば引用される一節であるが，この体験が，それまで無批判に学んできた西洋の生物学から，今西独自の生きものを対象にした生物学へと大きく変貌を遂げる契機になったのである。

> わたしは谷ぞいの道を歩いていた。灌木の葉の上に，バッタが一匹とまっていた。そのとき思った――おれはいままで，昆虫をやたらに捕らえて，毒瓶で殺し，ピンでとめ，名前をしらべて喜んでいたが，この一匹のバッタが，この自然の中でいかに生きているかということについては，まるでなにも知らないではないか。これでは情けないと思ったのである。たまたま卒業論文には，なにをやろうかと迷っていたときだった。わたしは生態学をやろうと決心した。（今西，1976 年，72 ページ）

西洋で生物が物体として扱われているという現実は，ほとんどの日本人には非常に理解しにくいので，ここで，その実態を，背景を含めて少々説明しておかなければならない。それには，心身二元論を唱えたことで知られるフ

［註３］ダーウィンの地質学の恩師でもあるアダム・セジウィックは，ケンブリッジ大学地質学教授に立候補して就任した時点では，数学と神学には通じていたが，地質学については無知同然であった。驚いたことに，当時は教授職に必ずしも実績が要求されなかったのである（松永，2009 年，71 ページ）。しかしながら，セジウィックは，教授に就任してから地質学を真剣に学び，英国本土やヨーロッパ大陸の地層を調査して，カンブリア紀の地層の分類法を確立するのである。これは，科学の草創期ならではのことではあるが，のみならず，科学発祥の地に住む者の心意気や潜在力を示すものでもあろう。

ランスの哲学者，ルネ・デカルト（1596–1650 年）の解説に耳を傾けることから始めるのがよいであろう。敬虔なキリスト教徒であったデカルトは，その『方法序説』の中で，動物の位置づけについて，次のように述べている。

> 多くの動物はその行動のあるものにおいては，われわれ人間をしのぐ巧みさを示すが，しかしその同じ動物が，多くの他の事がらにおいてはまったくそれを示さぬことが認められる。したがって彼らがわれわれよりうまくやるということは，彼らが精神をもつということを証明するものではない。〔中略〕あたかも時計が，車とぜんまいとだけから組み立てられているにもかかわらず，われわれが知恵をしぼってもおよばぬ正確さで，時刻を数え時間をはかることができるようなものである。（デカルト，1974 年，71 ページ）

動物は，どれほど複雑な行動をしたところで，“精神”や“魂”はなく，しょせんは機械にすぎないということである。こうした考えかたを基盤とする文化圏では，動物の主体性や個別性が認められることはない。今西の個体識別という方法論が西洋の生物学者の間で論議を呼んだのも，今では高い評価を受けているジェーン・グドールによるチンパンジーの野外観察がしばらく認められなかった（アスキス，1984 年，42 ページ）のも，動物をそれぞれ独立した個体として扱う，つまり生きものとして尊重する伝統がないためだったのであろう。上智大学教授で，カトリック司祭でもあったベルギー出身の人類学者，ジャン・北原フリッシュ（1926–2007 年）によれば，動物には霊魂がないため，動物を単なる物体として扱うというキリスト教の教えを日本人に説くのは，非常に難しかったという（同書，38 ページ）。

ところがその一方で，キリスト教の聖人であるアッシジの聖フランチェスコは，さまざまな動物と会話ができたと言われるし，わが国のキリシタン時代には，その中心地であった天草で，イソップ物語の邦訳（『伊曾保物語』）が，ほかならぬイエズス会の宣教師たちによって刊行されているのである。その中では，周知のように，動物が人間の言葉を話している。

また，欧米には，そうした古典的な作品から，今西も高く評価する『シー

表１－１　20 世紀半ば以前の西洋の動物文学

作　品　名	発表年	作　　者
長靴をはいた猫	1697 年	シャルル・ペロー
三匹の子豚	18 世紀後半	作者不詳
アンデルセン童話	1843 年	ハンス・C・アンデルセン
フランダースの犬	1872 年	ウィーダ（イギリスの作家）
黒馬物語	1877 年	アンナ・シュウエル
昆虫記	1878 年以降	ジャン・H・ファーブル
ジャングル・ブック	1894 年	ラドヤード・キップリング
動物記	1898 年	アーネスト・T・シートン
荒野（野性）の呼び声	1903 年	ジャック・ロンドン
みつばちマーヤの冒険	1912 年	ワルデマル・ボンゼルス
ドリトル先生シリーズ	1920 年以降	ヒュー・ロフティング
バンビ	1923 年	フェーリクス・ザルテン

ここでは，ウィキペディアの記述を参考にして，わが国でもよく知られているものを中心に集めた。シートンの『動物記』はともかく，ファーブルの『昆虫記』はここに含めるべきではないのかもしれないが，執筆の精神と言うべきものは多少なりとも共通しているように思われるため，あえて含めることにした。ちなみに西洋には，動物文学というジャンルは特に存在しないようである。

トン動物記』や『ドリトル先生』のような作品に至るまで，すぐれた動物文学が断続的に紡ぎ出され，読み継がれてきた歴史が厳然と存在する（表１－１参照）。そうすると，事実とフィクションを同列に扱うべきではないとしても，どこかしら釈然としない感じが残る。加えてペットは，いかに西洋文化圏であっても，単なる物体として扱われるわけではない。実際に，「四肢の動きを通じて思いを伝えることで，われわれ人間は動物たちと交流できる」という発言もある（Wolff, 1916, p. 99. 傍点＝引用者）。人間の思念を伝えることのできる相手として見ているということであろう。それに対して，ほとんどの動物の研究者は，動物の“心”のようなものは認めないのである。

さらに言えば，欧米では，わが国と違って昆虫採集のような趣味は全くと言ってよいほど存在しない（朝日新聞，2010 年６月 20 日夕刊，「ひと」欄。Kaminski, 2009, p. 8）。セミの鳴き声はおろか，キリギリスやスズムシなどの鳴き声すら区別されることもなく，単なる騒音として片づけられるのである。[註４]

それどころか，信じがたいことに，アンリ・ファーブル（1823–1915 年）の厖大な著作集である『昆虫記』はおろか，ファーブルという碩学の存在自体も，フランス本国では，その生地ですらほとんど知られていないという現実がある（津田，2007 年，24–31 ページ）。そのような事実を勘案すると，ベルクソンが『創造的進化』の中でファーブルの観察記録を詳細に引用しているのは，かなり例外的なことなのであろう。

ちなみに，虫の鳴き声は，日本人では言葉を処理する側である優位（ほとんどは左）半球で処理されるが，欧米人では，雑音と同じく劣位（ほとんどは右）半球で処理されるという周知の研究もある（角田，1978 年，Tsunoda, 1987, 1989）。和田法[註5]にヒントを得て開発された，処理半球を特定するための検査法を用いたこの研究[註6]の結果が事実であれば，脳の使いかたは文化圏によって大きく異なることになる。脳が何かの道具になっているということであり，したがって，脳を操る，脳よりも高位の実在が存在する可能性が高くなると

［註４］小泉八雲は，その随筆「虫の音楽家」の中で，次のように述べている。「日本の文学におけると同様に，日本の家庭生活のなかにおける虫の音楽が占める位地，これはわれわれ西洋人にとっては，ほとんどまだ未開発のままになっている精神領域に発達した，一つの美的感受性のあることを実証していはしないだろうか。あの縁日に虫屋の，降るように虫の鳴きすだいている屋台は，西洋ならばそれこそ不世出の詩人だけが洞察するもの〔中略〕を，ただの庶民が，だれもかれもおしなべて理解していることを示していはしないか（小泉，1975 年，322 ページ）。

［註５］和田法とは，北海道帝国大学出身の神経科医，和田淳の創始になる，大脳優位半球を特定する検査法のことで，大脳手術の前に，どちらの側に言語野があるかを調べるために用いられる，今なお世界的に有名な方法である。ちなみに，Wikipedia の英語版をはじめとする外国語版には Jun Atsushi Wada や Wada test の項目があるが，日本語版には両者ともなぜか存在しない。

［註６］角田の主張とは裏腹に，この研究の妥当性に関しては，未だに決着がついていないように見える。それだけ重要な研究ということなのであろう。たとえば，今西と親交の深かった柴谷篤弘は，角田の主著の好意的書評（長文の解説）を欧文の雑誌に載せている（Sibatani, 1980）し，湯川秀樹や市川亀久彌らも肯定的な評価を下している（湯川他，1976 年）のに対して，大脳生理学者の久保田競は，実験法の不備を指摘するなど，かなり批判的な立場をとっている（久保田，1990 年）。欧米の脳研究者はあまり発言していないようであるが，言語研究者などの中には冷笑的な態度を示す者（たとえば，Hinenoya & Gatbonton, 2000, p. 230）もある。

いうことである。

このように，西洋では，神が創造したという点では同じでも，神の姿に似せて造られた人間は，自然界の中で唯一にして絶対のものなのである。キリスト教の神は，天地創造の４日目と５日目に，あらゆる動植物を造り，最後に人間を造った。創世の当初から，人間は動植物とは完全に異質なものなのであった。

> 我々にかたどり，我々に似せて，人を造ろう。そして海の魚，空の鳥，家畜，地の獣，地を這うものすべてを支配させよう。」神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。「産めよ，増えよ，地に満ちて地を従わせよ。海の魚，空の鳥，地の上を這う生き物をすべて支配せよ。(『新共同訳聖書』「創世記」第１章 26–30 節)

両者の間には，支配する側とされる側という点でも，このように絶対的な断絶がある。それを，現代でもそのままの形で通用する，きちんとした科学的方法論に則った豊富な裏打ちによって否定し，動物と人間はつながっていることを示唆することで，西洋キリスト教世界に激烈な衝撃を与えたのが，チャールズ・ダーウィンなのであった。ダーウィンの一連の著作によって，人間は，動物と同じレベルになり下がったとともに，動物と同じく，精密な機械であるという見解が，それなりの科学的裏づけを得たということである。

それまでは，人間を機械と同列のものとする考えかたに対しては，強烈な非難が浴びせかけられるという状況が，当然のことながら続いていた。現在の主流科学者からすれば想像を絶することであろうが，「精神は独立した実体ではなく，脳の機能にすぎない」などと発言しただけで，学会の記録から抹殺されてしまうほどの状況だったのである（松永，2009 年，45 ページ）。

そのダーウィンの進化論の基盤になっている自然選択説に対しては，神による創造説の陣営以外からも，いくつかの反論があった。そのうち，生命の自発性という見地から反駁を加えたのが，ユダヤ教徒であり，死の直前にカトリックに改宗するベルクソンの主著『創造的進化』なのである。